

26名である。

#### 〔Ⅱ〕方法

① 採取：鼻腔内は綿棒，上顎洞などは穿刺にて検体を採取し，ケンキポーター（クリニカルサプライ）に入れて輸送した。

② 分離同定：分離は大部分増菌法によつた。同定は岐大嫌気性菌実験施設の方法によつた。

③ 感受性検査：16種の薬剤について検討した。化学療法学会の定める標準法に従つて最小発育阻止濃度（MIC）を求めた。接種菌量は $10^6$ ， $10^8$ の二点法とした。

#### 〔Ⅲ〕結果

① 鼻疾患 97名中 24名（24.7%）に嫌気性菌が検出された。主なものは，併合性副鼻腔炎 39例中 13例（33.3%），上顎腫瘍 4例中 1例，術後性頬部嚢腫 20例中 1例などである。

② 分離された菌種は，*Bacteroides fragilis* 4株，*Veillonella parvula* 4株，*B. fragilis* 以外の *Bacteroides* 3株，*Propionibacterium* 2株，*Fusobacterium* 1株，*Bifidobacterium* 1株，*Peptococcus magnus* 2株，*Peptostreptococcus micros* 1株，*Peptococcus species* 1株，*Streptococcus cons*

*tellatus* 1株であつた。

③ 薬剤感受性パターンを見てみると，TC 耐性株が *B. fragilis*，*Propionibacterium*，*P. magnus* に認められ，CLDM 耐性株は *B. fragilis* では認められなかつたが，*Propionibacterium*，*P. magnus* には認められるなど，今回分離された嫌気性菌は，薬剤に対する耐性を獲得する傾向にあることがわかつた。

#### 質疑応答

馬場（名市大） 貴教室の以前の発表では *Bacteroides melaninogenicus* の検出率が高く，その臨床的意義が強調されていたが，今回の発表ではそれが含まれていない。それがどのような理由によるものか御教示下さい。

西本（岐阜大） *B. melaninogenicus* が生えやすい血液寒天培地，メナジオン加 GAM 寒天培地を今回は用いながつたため，*B. melaninogenicus* は同定されていません。しかし，*Bacteroides spp.* の中には *B. melaninogenicus* と思われるものが存在していました。

## 慢性副鼻腔炎に対する各種薬剤による ネブライザー療法の検討

—Lysozyme ならびに Thiamphenicol 混合液による治験成績—

古田 茂 ・ 昇 卓夫  
森川 謙三 ・ 大山 勝\*

慢性副鼻腔炎の治療において，今日ネブライザー療法は広く用いられ，その有用性についての報告もみられる。しかし，その薬剤の選択や用量については，必ずしも合理的な結論に達していないのが現状である。

今回，われわれは，1978年8月より1979年7月までの1年間に鹿児島大学およびその関連病院において，慢性副鼻腔炎症例に対する2～3の薬剤の単独な

いは併用ネブライザー療法を試み，それらの臨床効果を比較検討した。その結果，これらの薬剤が慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法の一つとして有用と考えたので報告した。

対象は68例で，試験薬剤として，3% Lysozyme 液と5% Thiamphenicol+3% Lysozyme 液であり，比較対照薬として生理食塩水を double blind の形で使用した。原則として週4回以上，4週間ネブラ

\* 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室

イザーをした。

調査項目は自覚的所見として、鼻閉、鼻漏、後鼻漏、頭重感の4項目を、他覚的所見として、粘膜腫脹、鼻漏、後鼻漏、粘膜発赤、X線所見の5項目について検討した。さらに総合判定として4週後に評価をした。

自覚的所見の改善度に関しては、3群間に有意差を認めない。他覚的所見では、X線所見および粘膜腫脹において、試験薬剤が対照より有意に優れた結果を得た。全般改善度では、Thiamphenicol 混合液、Lysozyme 単独、対照の順の成績が得られ、統計学的にも有意差が認められた。

副作用の発現をみたものはなく、ネブライザー療法中に不快感などを訴えた症例も認めなかった。

治療終了後、難治性の症例に対しては、Cepharanthin 液を混合した溶液を用いて良好な結果を得ている。

しかし、慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法に際しては、今後、薬剤の選択、そして、それらの適当な組み合わせを考え、病態に最もかなった合理的な治療が行えるよう努力しなければならないと考える。

#### 質 疑 応 答

小宮山 (九州大) ① プラセボには何を用了か。  
② Lysozyme と Thiamphenicol との併用効果は、いかなる機序によるかと考えるか。

古田 (鹿児島大) Placebo は生食水を使用した。Lysozyme と Thiamphenicol との併用を行ったのは、Lysozyme 存在の下では抗生剤の吸収が促進するという効果を考えた。また、Lysozyme 単独においても、Lysozyme が細胞膜の N-acetyl-gluco-samin と N-acetyl-muramin 酸の間を加水分解することによる溶菌作用を有するために本剤をネブライザー液として選択した。

## 耳鼻咽喉科感染症に対する Midecamycin 誘導体 MOM 錠の使用小験

森 川 謙 三 ・ 古 田 茂 ・ 大 山 勝\*

耳鼻咽喉科領域で扱う急性感染症はその大半がグラム陽性球菌単独、あるいはそれを主体とする混合感染である。なかでもブドウ球菌の関与する比重がきわめて大きいとされている。したがって、本領域の急性感染症にはグラム陽性菌に対して強力かつ抗菌スペクトルの広い抗生物質が第一選択剤として使用されてきた。とりわけ、マクロライド系薬剤はペニシリン系薬剤やテトラサイクリン系薬剤に比して重篤な副作用が少ないことから、過去耳鼻咽喉科領域の急性感染症に対して広く頻用されてきた。しかし、近年マクロライドの肝障害が問題視され、また、多剤耐性ブドウ球菌や嫌気性菌などに対する対応とともに、改めてその検討が求められていた。

今回、われわれは耳鼻咽喉科領域における代表的感染症 20 症例に対して、Midecamycin の誘導体である新抗生物質 MOM 錠を経口投与し、その臨床効果を検討した結果、つぎのような成績がえられた。

1) 臨床成績では著効 4 例、有効 10 例、やや有効

5 例、無効 1 例であり、著効・有効を合算した有効率は 20 例中 14 例 70%であった。

2) グラム陽性菌感染では 71.5% の有効率がえられ、一方、グラム陽性桿菌が検出された症例においても 50% に効果が認められた。

3) 本剤の経口投与中に副作用と考えられる症状の発現はまったく認められなかった。

以上の成績を総合するとき、MOM 錠は耳鼻咽喉科領域の感染症に対しては、臨床的に有用性の高い抗生物質として推奨しうるものと思われる。

#### 質 疑 応 答

柳内 (旭川日赤) 急性中耳炎症例において、年令、鼓膜切開、他剤併用について御教授下さい。

森川 (鹿児島大) 年令は全例成人で、他の薬剤併用療法は当然行わず、鼓膜切開の加療のみを行いました。

\* 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室